

トップレベル女子剣道選手の技術傾向： 全日本剣道選手権大会の男女比較を通じて

Tendency of Top Female Kendo Players' Technique: Through a Comparison between Male and Female Players' Matches at All Japan Kendo Championships-

キーワード：ゲームパフォーマンス分析, 打突, 攻め

Keywords: Analysis of game performance, *Datotsu*, *Seme*

瀬川 剛¹⁾ 佐々木 陽一郎²⁾

進藤 暖佳²⁾ 大野 達哉³⁾

SEGAWA Go SASAKI Yoichiro

SHINDOU Haruka OHNO Tatsuya

¹⁾ 東京女子体育大学 ²⁾ 筑波大学人間総合科学研究科 ³⁾ サレジオ工業高等専門学校
Tokyo Women's College of Physical Education
Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
Salesian Polytechnic

Abstract

This research, aims to clarify female kendo players' unique techniques through a comparison between male and female players' *datotsu* and *seme*. We looked at data from quarterfinals and above for a total of 55 matches sourced from the 55-58th All Japan Women's Kendo Championships and the 64-67th All Japan Kendo Championships. The following two findings were concluded to help teach female kendo players;

- 1) Regarding *datotsu*, while *hiki-waza* is observed at a high percentage in female players' matches, *dehana-waza*, *kaeshi-waza* and *katsugi-waza* are observed at a high percentage in male players' ones. While *hiki-waza* is especially indicated as an indispensable technique for female players' matches. On the other hand, the *dehana-waza* is often observed at male players' matches, which is avoided by females players because of issues relating to risk control.
- 2) Regarding the style of "*seme*", while "*datotsu-motion* (feint)", "pressing down opponent's *shinai*" and "containing by hitting opponent's *tsubamoto*" are observed at a high percentage at female players' matches, "narrowing down *maai* by keeping one's *kamae*" and "lowering *kensen*" are observed at high percentage at male players' ones. Hitting by bouncing from *shinai-contacted* condition is a tendency at female' players' matches. Similar results are also acquired in case of ending up with *yuko-datotsu*.

緒言

剣道は、江戸時代中期における竹刀・防具の開発によってそれまでの剣術から脱皮し、現代剣道を形成する起点となった。その後、その精神及び身体の錬成効果に教育的価値が見出され、発展してきた²⁵⁾。しかし、第二次世界大戦後、GHQの教育民主化政策のもと、戦争遂行に加担したものとして、剣道は禁止された。禁止期間は1953年まで8年間にわたり、その間、「しない競技」を経て、再出発を果たしたが、そこで新たに大きな軸となったのが、女子剣道である。学校教育として復帰していく中で、1960年代には男女共学が一般化したことや女性の社会進出の機運が高まっていたことも、女子剣道の活性化に大きな影響を与えた。

これまでに、女子剣道を対象としたものは、前田⁶⁾の体育における女子剣道の位置について質問紙法を用いて明らかにした研究を皮切りに、佐藤¹⁹⁾の大学女子剣道選手の稽古頻度が体力及び技術向上に及ぼす影響を明らかにした研究、山神²²⁾の上下肢の脂肪・除脂肪断面積を算出し、女子剣道競技者の形態的特性を明らかにした研究など各領域で有益な知見が得られている。また、新里²⁰⁾は女子剣道の誕生前史を「しない競技」に焦点を当て、明らかにするなど戦後の剣道復活から70年近くが経ち、その歩みを振り返るような研究も散見される。

一方で、大塚¹³⁾¹⁴⁾は女性剣士が男女の相違を十分理解する必要があるとし、剣道の技術は基本的に性差がないとされているが、身体的・精神的特性は異なるため、今後、女性ならではの特性を活かした技術や修練方法の研究・検討が望まれていると述べている。植田²³⁾は、男女の打突動作を比較、検討し、男女間の相違は、筋力などの身体的特性の差によるものであると報告している。ここで明らかにされた男女間の相違は、打突動作についてのみであったが、これ以外にも男女間で違いが見られるはずである。江刺家³⁾は、男性剣道実践者からとかく「タイミングが合わない」「調子が狂う」と言われるが、それは男性よりも柔軟性や巧緻性で上回っている可能性が示唆されるとしているが、それを裏付けるデータは示されて

いない。つまり、先行研究においては、その身体的特性や意識を明らかにされているものの、女性剣道選手が如何なる技術特性を保有するかについては管見の限り明らかにされていない。

こうした技術を明らかにする手法として、ゲームパフォーマンス分析がある。選手が試合で達成したパフォーマンスの分析がコーチング活動を効果的に行うために重要な意味を持っていることは現在ではコーチング現場で広く認められている¹⁵⁾。剣道においても、ゲームパフォーマンス分析はこれまで数多く行われている。恵土²⁾は、全日本剣道選手権大会で発現された攻めと打突に着目し、有効打突に結びつきやすい攻めから打突の流れを明らかにした。中村¹²⁾は試合開始から終了までの全動作を把握するためのプログラムを作成し、試合者の対応動作を比較しつつ、その有効性を明らかにした。

ただこれらはいずれも対象が男子の試合・大会であり、女子大会の試合内容分析は報告数が少なく、近年では、鷹見²²⁾が全日本女子剣道選手権大会を対象として試合内容分析を行い、「女子大会では、先行研究の男子大会と比較して、性差による体格・体力の影響、およびそれに伴う体の運用ならびに竹刀操作の影響に起因すると推察される相違点が各項目でみられた。」と報告している。ただ、この研究は単年度の大会を対象としており、試合数も少量であり、包括的な分析には至っていない。

そこで、本研究では、第55～58回全日本剣道女子選手権大会と第64～67回全日本剣道選手権大会準々決勝以上、計55試合を対象として、男女両選手の発現する打突及び攻め方の比較・検討を行うことで、女子剣道トップ選手特有の技術傾向を明らかにし、女子剣道選手への指導の一助となる有益な知見を得ることを目的とする。

方法

対象大会及び試合

2016～2019年に開催された第55～58回全日本女子剣道選手権大会、第64～67回全日本剣道選手権大会を対象とし、各大会準々決勝以降の7試合、計

56試合から上段選手の試合(第58回全日本女子剣道選手権大会準々決勝第2試合)を除いた55試合を分析した。男女各4大会を集計し、各項目でそれぞれ比較・検討を行った。

分析方法

対象試合の映像資料は、全日本剣道連盟が公表している動画を再生し、女性を含む剣道有段者4名で、剣道指導要領²⁵⁾と先行研究²⁾¹⁷⁾を参考に作成した分類項目に準じて分類・集計し、検討した。

分析対象

分析対象は、対象試合で発現された技、攻め方とした。

- 本研究では、打突の要件を
 - ・竹刀の打突部で相手の打突部位(メン・コテ・ドウ・ツキ)の4種類を打突していること。
 - ・打突の際に声を発していること。
 - ・踏み込み動作を行っていること。(胴技は踏み込まない場合もあるので例外とした。)
- これらの要素を伴った打ちを打突と判断した。

分析項目

1. 打突について

(1) 発現した打突の打突部位

対象試合で発現された打突の部位は「メン」「コテ」「ドウ」「ツキ」と分類・集計した。

(2) 発現した打突の技

対象試合で発現された打突を、剣道指導要領²⁵⁾の技の項目に基づき以下の通り分類・集計した。しかけ技は「一本打ちの技、連続技、払い技、捲き技、出ばな技、引き技、かつぎ技」の7項目、応じ技は「抜き技、すり上げ技、返し技、打ち落とし技」の4項目、計11項目とした。

(3) 発現した有効打突の技

対象試合で発現された有効打突を、分類・集計した。分析項目は、上記の(2)と同様とした。

2. 攻め方について

(1) 発現した攻め方

対象試合で発現された打突直前の攻め方を以

下の通り分類・集計した。

攻め方の分類は、「剣先をまわし中心を攻める」、「打突モーション(フェイント)」、「相手の竹刀を上から押さえる」、「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」、「相手の鍔元を叩き牽制する」、「腕を伸ばして相手の喉元に剣先を付ける」、「剣先を上げ中心を攻める」、「構えを維持し間合をつめる」、「防御の体勢で間合をつめる」の10項目を分類項目とした。

(2) 有効打突に繋がった攻め方

対象試合で発現された有効打突直前の攻め方を、分類・集計した。分類項目は、上記の(1)と同様とした。

統計処理

全ての統計処理にはIBM SPSS Statistics ver.27.0(IBM社製)を用いた。男女の差を検討するために、カイ2乗検定を行った。その後の事後検定として、残差分析を行い、割合の比較を行った。全ての分析で有意水準を5%未満、有意傾向の水準を10%未満とし、微細な相違を積極的に検証できるようにした。

結果

1. 打突について

(1) 発現した打突の部位別の割合

表1には、男女の対象試合で発現した打突(女子1155本、男子650本)の部位別の割合と本数を示した。

発現した打突の部位別の割合については、男女ともにメン、コテ、ドウ、ツキの順で発現割合が高かった。発現打突の部位別の割合には、男女間に有意な差はみられなかった($X^2[3] = 3.84, p=0.28$)。

表1 発現した打突の部位別の割合

打突部位	女子	男子	有意差
	割合(%) (本数(本))	割合(%) (本数(本))	
メン	56.4 (651)	59.7 (388)	n.s.
コテ	36.5 (421)	35.1 (228)	n.s.
ドウ	5.3 (61)	3.5 (23)	n.s.
ツキ	1.9 (21)	1.7 (11)	n.s.

(2) 発現した打突の技別の割合

表2には、男女の対象試合で発現した打突の技別の割合を示した。

女子では、一本打ちの技、引き技、連続技、出ばな技、かつぎ技、返し技、抜き技、払い技、すり上げ技、打ち落とし技、捲き技の順であった。男子では、一本打ちの技、出ばな技、引き技、連続技、かつぎ技、返し技、抜き技、すり上げ技、打ち落とし技、払い技の順であった。捲き技は発現がなかった。

発現した打突の技別の割合には、男女間で有意な差がみられた ($X^2[10] = 689.80$, $p < 0.000$)。事後検定の結果、引き技の発現割合に有意な差がみられ、女子が男子よりも高かった ($p < 0.01$)。一方、出ばな技、返し技、かつぎ技の発現割合にも有意な差がみられ、女子が男子よりも低かった ($p < 0.01$)。また、一本打ちの技、払い技の発現割合に有意傾向がみられ、女子が男子よりも高かった ($p < 0.1$)。一方で、抜き技の発現割合にも有意傾向がみられ、女子が男子よりも低かった ($p < 0.1$)。

表2 発現した打突の技別の割合

技分類	技名称	女子		男子		有意差
		割合 (%) (本数/本)		割合 (%) (本数/本)		
しかけ技	一本打ちの技	61.6 (711)	>	56.0 (364)		+
	連続技	7.4 (85)		8.9 (58)		n.s.
	払い技	1.4 (16)	>	0.5 (3)		+
	引き技	18.2 (210)	>	9.7 (63)		**
	かつぎ技	2.9 (34)	<	5.5 (36)		**
	捲き技	0.1 (1)		0.0 (0)		n.s.
応じ技	出ばな技	3.6 (41)	<	10.2 (66)		**
	抜き技	1.6 (16)	<	2.5 (16)		+
	すり上げ技	1.0 (13)		1.2 (8)		n.s.
	返し技	2.0 (23)	<	4.9 (32)		**
	打ち落とし技	0.4 (4)		0.6 (4)		n.s.

** : $p < 0.01$ + : $p < 0.1$

(3) 発現した有効打突の技別の割合

表3には、男女の対象試合で発現した有効打突 (女子:47本, 男子:49本) の技別の割合を

示した。

一部同じ割合もあるが、女子は一本打ち技、引き技、出ばな技、払い技、連続技、抜き技、返し技、かつぎ技、すり上げ技の順であった。なお、捲き技と打ち落とし技は有効打突となった打突はなかった。男子は、出ばな技、一本打ちの技、返し技、すり上げ技、連続技、引き技、かつぎ技、抜き技の順で発現割合が高かった。なお、払い技、捲き技、打ち落とし技は有効打突となった打突はなかった。

発現した有効打突の技別の割合には、男女間で有意な差がみられた ($X^2[8] = 16.56$, $p < 0.035$)。事後検定の結果、引き技の発現割合に有意な差がみられ、女子が男子よりも高かった ($p < 0.01$)。一方、出ばな技の発現割合にも有意な差がみられ、女子が男子よりも低かった ($p < 0.01$)。

表3 発現した有効打突の技別の割合

技分類	技名称	女子		男子		有意差
		割合 (%) (本数/本)		割合 (%) (本数/本)		
しかけ技	一本打ちの技	31.9 (15)		34.7 (17)		n.s.
	連続技	4.3 (2)		2.0 (1)		n.s.
	払い技	6.4 (3)		0.0 (0)		n.s.
	引き技	23.4 (11)	>	2.0 (1)		**
	かつぎ技	2.1 (1)		2.0 (1)		n.s.
	捲き技	0.0 (0)		0.0 (0)		n.s.
応じ技	出ばな技	21.2 (10)	<	46.9 (23)		**
	抜き技	4.3 (2)		2.0 (1)		n.s.
	すり上げ技	2.1 (1)		4.1 (2)		n.s.
	返し技	4.3 (2)		6.1 (3)		n.s.
	打ち落とし技	0.0 (0)		0.0 (0)		n.s.

** : $p < 0.01$

2. 攻め方について

(1) 発現した攻め方の割合

表4には、男女の対象試合で発現された打突直前の攻め方 (女子654回, 男子511回) の割合と回数を示した。女子は、「構えを維持し間合をつめる」、「打突モーション(フェイント)」、「防御の体勢で間合をつめる」、「剣先を下げる」、「相

手の竹刀を上から押さえる」,「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」,「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」,「剣先を開く」,「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」,「剣先を回す」の順であった。男子は,「構えを維持し間合をつめる」,「打突モーション(フェイント)」,「防御の体勢で間合をつめる」,「剣先を下げる」,「相手の竹刀を自分の鎧で上から押さえる」,「剣先を回す」,「剣先を開く」,「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」,「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」,「相手竹刀のつば元を叩き牽制する」の順であった。

発現した攻め方の割合には,男女間で有意な差がみられた($X^2[9] = 54.36, p < 0.000$)。事後検定の結果,「打突モーション(フェイント)」,「相手の竹刀を上から押さえる」,「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」の発現割合に有意な差がみられ,女子が男子よりも高かった($p < 0.01$)。一方,「構えを維持して間合を詰める」,「剣先を下げる」の発現割合にも有意な差がみられ,女子が男子よりも低かった($p < 0.01$)。また,「竹刀を頭上に振りかぶる」の発現割合に有意傾向がみられ,女子が男子よりも高かった($p < 0.1$)。

表4 発現した攻め方の割合

攻め方	女子	男子	有意差
	割合 (%) [本数(本)]	割合 (%) [本数(本)]	
剣先を回す	1.4 [9]	2.9 [15]	n.s.
打突モーション(フェイント)	23.9 [156]	16.2 [83]	**
相手の竹刀を上から押さえる	7.0 [46]	3.5 [18]	**
竹刀を頭上に大きく振りかぶる	2.4 [16]	1.0 [5]	+
相手の竹刀のつば元を叩き牽制する	3.4 [22]	0.2 [1]	**
腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける	2.8 [18]	2.2 [11]	n.s.
剣先を下げる	7.3 [48]	13.5 [69]	**
構えを維持し間合をつめる	33.3 [218]	42.9 [219]	**
防御の体勢で間合をつめる	15.9 [104]	14.9 [76]	n.s.
剣先を開く	2.6 [17]	2.7 [14]	n.s.

** : $p < 0.01$ + : $p < 0.1$

(2) 有効打突に繋がった攻め方の割合

表5には,男女の対象試合で発現された有効打突(女子:34本,男子:51本)に繋がった攻

め方の割合の割合と回数を示した。

一部同じ割合もあるが,女子は,「構えを維持し間合をつめる」,「防御の体勢で間合をつめる」,「打突モーション(フェイント)」,「相手の竹刀を自分の鎧で上から押さえる」,「剣先を開く」,「剣先を回す」,「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」,「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」の順であった。なお,「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」,「剣先を下げる」攻め方は有効打突に繋がるケースはなかった。男子は,「構えを維持し間合をつめる」,「剣先を下げる」,「防御の体勢で間合をつめる」,「剣先を回す」,「腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける」,「打突モーション(フェイント)」,「相手の竹刀を自分の鎧で上から押さえる」,「竹刀を頭上に大きく振りかぶる」,「剣先を開く」の順であった。なお,「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」攻め方は有効打突に繋がるケースはなかった。

有効打突に繋がった攻め方の割合には,男女間で有意な差がみられた($X^2[9] = 25.97, p < 0.002$)。事後検定の結果,「フェイント(打突モーション)」,「相手の竹刀を上から押さえる」に有意な差がみられ,女子が男子よりも高かった($p < 0.01$)。一方,「構えを維持して間合をつめる」にも有意な差がみられ,女子が男子よりも低かった($p < 0.01$)。また,「剣先を下げる」には,有意傾向がみられ,女子が男子よりも低かった($p < 0.1$)。

表5 有効打突に繋がった攻め方の割合

攻め方	女子	男子	有意差
	割合 (%) [本数(本)]	割合 (%) [本数(本)]	
剣先を回す	2.9 [1]	5.9 [3]	n.s.
打突モーション(フェイント)	17.6 [6]	2.0 [1]	**
相手の竹刀を上から押さえる	17.6 [6]	2.0 [1]	**
竹刀を頭上に大きく振りかぶる	2.9 [1]	2.0 [1]	n.s.
相手の竹刀のつば元を叩き牽制する	2.9 [1]	0.0 [0]	n.s.
腕を伸ばして相手の喉元に剣先をつける	0.0 [0]	3.9 [2]	n.s.
剣先を下げる	0.0 [0]	9.8 [5]	+
構えを維持し間合をつめる	29.4 [10]	62.7 [32]	**
防御の体勢で間合をつめる	20.6 [7]	9.8 [5]	n.s.
剣先を開く	5.9 [2]	2.0 [1]	n.s.

** : $p < 0.01$ + : $p < 0.1$

考察

打突について

打突部位別で見ると、男女で有意な差は見られなかったが、メンが最も多く、コテがそれに続き、ドウとツキが一割程度という比率は、先行研究²⁾¹⁰⁾¹²⁾を支持する結果となり、選手が選択する打突部位は時代や性別を超えて、共通するものであると言える。

技別で見ると、男女ともにしかけ技の一本打ちの技が最も大きい割合を示し、女子の方が有意に高い割合を示した。

女子で続いて多いのが引き技である。男子が9.7%に対し、女子は18.2%であり、有意に高い割合を示した。一方、男子では出ばな技が多く見られた。男子の10.2%を占め、女子の3.6%と比較し、有意に高い割合を示した。トップレベルの大学女子剣道選手の試合特性を明らかにした研究⁸⁾においても、女子は一本打ちの技の次に引き技が多く、出ばな技が少ないとされており、先行研究を支持する結果となった。

引き技に関しては、先行研究で前田ら⁷⁾が高校生と大学生の男女を対象に研究しており、「引き面」「引き小手」などの技は、男子より女子に多くみられると報告しており、これを支持する結果となった。

佐々木ら¹⁷⁾は男子において、平成前期に引き技の技術が向上したことで、平成後期では引き技を打たせない技術がさらに高まり、結果として引き技が減少したとしている。この傾向が本研究でも見られ、男子よりも女子が有意に多い傾向を示したのではないかと考えられる。今後、女子でも同様に、防御の技術が高まることで引き技が減少する可能性もあり、動向を注視する必要がある。

また、馬場ら¹⁾は剣道の試合の本質はお互いの一足一刀による攻防の技前による緊張感と充実感が、行う者と観る者に剣道の醍醐味と魅力を与えてきたと報告している。男子の大会では審判員も最高位の範士八段を保有する者が勤めており、教士七段の女性を中心とする審判員が裁く女子大会よりもそうした剣道本来の醍醐味である技で勝負を決するべきという観点が強いと考えられることから、選手も錨ぜり合いから、引き技を出すのではなく、こう着状態を早く解消しようと

するのではないかと推察する。

一方、出ばな技は剣道指導要領²⁵⁾において、相手が攻め込もうとしたり、打突をしようとする動作の起こり端を捉えて打ち込む技とされ、指導上の留意点として「瞬間的な技であるので、機会を的確に捉えて打突動作を素早く身体全体で打つように」と述べられている。男子に比べ、敏捷性に劣る女子は、出遅れると逆に相手に打たれてしまう出ばな技を選択することが少ないと考えられる。

また、かつぎ技においても、男子の方が高い割合を示した。この技は、竹刀の振幅が大きく、筋力が必要とされる。そのため、竹刀を振る力が優る男子の方が発現させやすいと考えられる。

応じ技は、女子はすべての技において男子より低い割合を示しており、特に返し技において、その差が顕著である。男子4.9%に対し、女子2.0%という結果となり、有意に高い割合を示した。女子の試合において散見されたのは、相手の打突を防御し、錨ぜり合いの状態にしてから、返して打突を出すケースである。集計上、これは引き技となるため、返し技をはじめとする応じ技が減少したと考えられる。男子に関しては近年の全日本選手権において「近間での応じ技(返し技)の技術が発展」したとする先行研究¹⁷⁾を支持する結果となった。

また、有効打突についての技別では、女子は、一本打ちの技が発現打突同様、最も多い結果となった。一方、男子は出ばな技が47%で、最も大きい割合を示した。男子は一本打ちの技が34.7%であり、出ばな技と合わせて八割以上を占め、直線的な動きが多い試合内容であることが示唆される結果となった。女子は、二番目に大きい割合が引き技23%、出ばな技21%と続き、この3つの技で多くを占める結果であった。

引き技は、男子ではわずか1本のみであったことから、やはり女子の試合においては、引き技が大きな鍵を握ることが明らかになった。

男女ともに大きい割合を示した出ばな技に関して香田⁵⁾は指導書の中で、出ばな技は相手が技を出すところであり、防御ができない状態にあり、試合や稽古で技が最も多く決まる打突の機会であるとしており、本研究においてもこれを支持する結果となった。

攻め方について

剣道指導要領²⁵⁾において剣道の対人的技能は「攻めて打つ事により成り立っているとされ、単に積極的に打突するのではなくむしろ打突の前の積極的な行動すなわち攻めに意味がある」としている。また佐藤¹⁸⁾は、十分に稽古を積んできた高段者や名選手といわれる剣士たちの稽古、試合で発現される打突は共通して無駄のない打突であり、これらの打突や動きはただ機械的に打ち込んでいるのではなく、その技、その一本を打ち出すまでの準備の段階にそれぞれの工夫や苦心、修練の特色が現れているとし、打突に至る前の攻めの重要性を述べている。本研究では、打突に至る直前の攻め方に焦点を当て、男女の差を明らかにし、女子剣道特有の攻め方が如何なるものかを考察する。なお、特に女子において、発現打突の回数と比べ、攻めの回数が少ないのは、引き技や対戦相手の打突より後で、応じ技である抜き技、すり上げ技、返し技、打ち落とし技のどの技にも該当しない打突をする、所謂「後打ちの技」を多用しているからであると考えられる。

男女ともに最も多く見られた攻め方が「構えを維持し間合をつめる」であった。ただ、男子42.9%に対し、女子は33.3%と有意に低い結果となった。続いて多いのは、「打突モーション(フェイント)」である。女子では23.9%を占めるが、男子では16.2%にとどまり、女子が有意に高い割合を示した。特に、この攻め方からのコテが多く見られた。これは、面を攻めることで、相手の手元を上げさせ、その隙を捉える技であり、その有効性は指導書でも指摘されている²¹⁾。

上記2つの攻め方で考えられるのは、出ばな技との関連性である。佐藤¹⁸⁾はオーソドックスな攻め合いを通して、「先」を取っていると、相手が意表について打とうとしても、その構えの崩れがかえって打突の好機となって、有利なように展開するとしている。出ばな技の発現が多い男子では、フェイントをする際にその隙を捉えられて、相手に機会を与えることになり兼ねないと判断し、この攻め方を多用せず、「構えを維持し間合をつめる」攻め方が多くなり、出ばな技の発現が少ない女子では割合としてこの攻め方が多くなっているのではないかと考えられる。

次に「防御の体勢で間合をつめる」が多く見られた。女子が16%、男子が15%で有意な差は見られなかった。この攻め方について、先行研究において中村ら¹¹⁾は右小手、面、右胴を同時にカバーする受け方(現代的な防御方法)から応じ技のつながりという観点ではほとんど見られなかったと報告している。一方、近年の全日本剣道選手権優勝者の試合特性を明らかにした研究¹⁷⁾では「相手から打突されるリスクを減らし自身が打突する際に得意な間合に入る技術、かつ防御の体勢から打突への技術が向上した」とその有効性が指摘されつつある。本研究においてもこれを追認する結果となった。この攻め方を多用すると、消極的な試合展開になる恐れがあることなど、その是非は再考すべきであるが、現代剣道、とりわけ試合においては必要な技術であると考えられる。

その他の攻めの方法で、女子が男子よりも有意に高い割合を示したのが「相手の竹刀を上から押さえる」である。佐藤¹⁸⁾はこの攻め方について、「押さえて打つ」あるいは「撥いて打つ」と表現し、どちらにおいても、単独の動きではなく、打突と一連の動作になるようにすべきであると述べているが、本研究の女子選手もそうした動作が数多く見られた。一方、男子が女子よりも高い割合を示したのは「剣先を下げる」である。女子の7.3%に対し、男子は13.5%であった。指導書において古川⁴⁾は構えが崩れない相手に対してはこの攻め方が有効であると述べている。男子選手の試合では、構えを維持し攻める回数が多いことは前述の通りである。それに関連して、この攻め方も増加したことが示唆される。

この2つの攻め方の大きな差は、お互いの竹刀が接触した状態で打ち出すか否かである。筋力で上回る男子は、剣先を一度下げ、その状態から大きく打ち出すことを得意とするが、女子は竹刀が触れ合った状態で操作し、打突動作に結びつけて行く傾向が強いと示唆される。これは「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」攻め方にも共通し、女子では22回(3.4%)見られるが、男子ではコテの1回のみで、有意に高い割合を示した。前述の打突でも、払い技で有意差が見られていることから、この傾向が示唆される。

有効打突で最も多かった攻め方は、発現打突同様、

男女ともに「構えを維持し間合をつめる」であったが、男子は62.7%と大きい数値を示したのに対し、女子は29.4%と小さい値を示したが、これも発現打突同様の理由であると考えられる。続いて、女子は「防御の体勢で間合をつめる」が20.6%で、男子の9.9%と比べ、高い割合を示した。笹木ら¹⁶⁾は防御姿勢が試合結果に与える影響を明らかにした研究において「男子学生大会においては、相手より防御姿勢の少ない方が勝率は高く、女子学生大会においては相手より防御姿勢の多い方が勝率は高かった」と述べている。本研究の女子選手も防御姿勢を巧みに遣い、有効打突を生み出している傾向が見られ、先行研究を支持する結果となった。

女子において、その他の攻めで大きい割合を示したのは発現打突同様、「打突モーション(フェイント)」と「相手の竹刀を上から押さえる」でどちらも17.6%(6本)であった。男子ではこの2つの攻め方はともに1本のみであり、女子に有効な攻め方であると考えられる。

結論

本研究では、第55-58回全日本剣道女子選手権大会と第64-67回全日本剣道選手権大会の準々決勝以上、計55試合を対象として、男女両選手の発現する打突及び攻め方の比較・検討を行うことで、女子剣道特有の技術を明らかにすることを目的とすることで、以下2つの女子剣道選手への指導の一助となる有益な知見が得られた。

発現打突では、引き技は女子が高い割合を示し、出ばな技、返し技、かつぎ技は男子が高い割合を示した。有効打突でも同様の傾向が見られ、特に引き技は女子の試合では必要不可欠な技術であることが示唆され、逆に男子で多く見られる出ばな技は、リスク回避の面から敬遠している可能性が示唆された。

攻め方では、「打突モーション(フェイント)」、「相手の竹刀を上から押さえる」、「相手の竹刀のつば元を叩き牽制する」で女子が高い割合を示し、「構えを維持し間合をつめる」、「剣先を下げる」は男子が高い割合を示した。女子選手が竹刀を接触させた状態

から反動をつけて打つ傾向が示唆された。有効打突に繋がった攻めでも同様の結果を得た。

以上から、女子選手は男子選手に比べ、竹刀を接触させた状態から反動をつけた攻め方で技を発現するが、有効打突に結びつかないケースが多く、その後、相手と鑢ぜり合いになったところから引き技を発現させる試合展開が多いと考えられる。

参考文献

- 1) 馬場欽司, 小森富士登(1989): 全日本剣道選手権大会における鑢ぜり合いの実態調査, 武道学研究22(2) 143-144
- 2) 恵土孝吉, 端由紀美, 渡辺香(1983): 剣道試合における分析的研究: 一流選手の技術, 金沢大学教育学部紀要32, 81-91
- 3) 江刺家由子(1993): 剣道の女子段位に関する一考察, 帯広大谷短期大学紀要30, 71-74
- 4) 古川和男(2020): 勝って打つ剣道, 体育とスポーツ出版社, 1-125
- 5) 香田郡秀(2018): 身になる練習法 剣道 質と実戦力を高める稽古法, ベースボールマガジン社, 1-175
- 6) 前田シンコ(1976): 体育における女子剣道の位置, 武道学研究9(2), 86
- 7) 前田シンコ, 八木沢誠(1986): 剣道における有効打突の分析的研究, 武道学研究19(2), 77-78
- 8) 前阪茂樹, 近藤直樹, 有馬佳代, 國分國友(2002): トップレベルの大学生女子剣道選手の試合特性について, 鹿屋体育大学学術研究紀要27, 49-57
- 9) 三木ひろみ, 西野明, 武藤健一郎, 土屋裕睦, 佐藤成明, 香田郡秀(1998): 大学女子剣道選手の対戦相手認知様式-試合を見た段階での対戦相手の捉え方-, 武道学研究31(2), 30-39
- 10) 武藤健一郎, 高橋健太郎, 齋藤実, 大塚真由美, 笹木春光, 天野聡, 吉村哲夫(2013): 世界剣道選手権大会にみられた有効打突について: 15WKCイタリア大会から, 武道学研究47, 33
- 11) 中村充, 菅波盛雄, 廣瀬伸良(1999): 「剣道における試合内容分析」-第45回全日本剣道選手権大会を対象として-, 武道学研究31(3), 26-34

- 12) 中村充, 岩切公治, 菅波盛雄, 廣瀬伸良 (2001): 試合分析からみた剣道技術の推移, 武道学研究 34 (1), 35-42
- 13) 大塚真由美 (2009): 女性と剣道, 剣道を知る事典, 日本武道学会剣道専門分科会編, 東京堂出版, 112-113
- 14) 大塚真由美 (2009): 女性剣道の普及と発展, 剣道を知る事典, 日本武道学会剣道専門分科会編, 東京堂出版, 162-163
- 15) ピーター・オドノヒュー (2020): スポーツパフォーマンス分析入門-基礎となる理論と技法を学ぶ-, 大修館書店, 1-223
- 16) 笹木春光, 天野聡, 大塚真由美, 松本秀夫, 吉村哲夫, 武藤健一郎 (2013): 剣道の試合における防御姿勢の実態に関する調査研究, 武道学研究 46, 122
- 17) 佐々木陽一郎, 瀬川剛, 有田祐二, 鍋山隆弘, 香田郡秀 (2019): 一流剣道選手の技術変遷に関する研究-平成期の全日本剣道選手権大会に着目して-, 日本武道学会第52回大会抄録集, 40
- 18) 佐藤成明 (1987): 剣道・攻めの定石, スキージャーナル, 1-205
- 19) 佐藤みどり, 小森園正雄 (1986): 女子剣道における稽古頻度とその習熟過程に関する研究, 武道学研究 18 (3), 30-38
- 20) 新里知佳野, 矢野裕介, 高野一宏, 八木沢誠 (2013): 女子剣道の誕生に果たしたしない競技の役割, 日本体育大学紀要 42 (2), 79-89
- 21) 鈴木剛 (2018): 洞察と戦略で勝つ! 剣道-全日本選手権優勝者が伝える, 状況に応じた試合運びの極意-, 誠文堂新光社, 1-158
- 22) 鷹見由紀子 (2012): 女子剣道における試合内容の特性-第50回全日本女子剣道選手権大会を対象として-, 順天堂大学大学院修士論文集
- 23) 植田史生, 坪井三郎, 福本修二 (1986): 剣道における筋電図学的研究-面打突における男女の上肢筋群の比較-, 日本体育学会大会号 37, 313
- 24) 山神真一, 百鬼史訓 (1988): 女子剣道競技者の上下肢の脂肪・除脂肪断面積について, 武道学研究 21 (2) 143-144
- 25) 全日本剣道連盟 (2009): 剣道指導要領, 1-181